

# オスカー・ランゲを悼む

都 留 重 人

## 1

ランゲから受けとったいちばん最近の手紙は、1965年7月13日付、イタリーのベネチアの療養所からのものであった。「9月のはじめまではここにいるつもりだ」とあって、病状のことは別に書いてなく、いつもながらの虫めがねで見るような細かい綿密な筆蹟で、この手紙の仲介をしてくれた鶴岡重成氏が療養所を訪ずれたときの印象でも危険を思わせる予感は無かったというから、10月2日のロンドンにおける死は、まことに意外であった。幼時から彼を悩ましていた背椎カリエスが原因で、享年61歳、ポヴォンスコフスキ墓地に葬られたという。

シュンペーターがハーヴァードへ席を移したのが1932年、それにくびすを接してレオンチェフ、ハーバラー等の新鋭外国人経済学者が同じ大学へ迎え入れられ、タウシグ色の強かったその経済学部を一新させたが、時あたかもヒトラーの登場があり、ヨーロッパの経済学者の多くがアメリカへ渡るとともに、ハーヴァードを訪れる顔ぶれも多彩となった。ランゲは、その中でも、いちやく来米したほうである。1934年になってからの講義で、ある日のこと、シュンペーターは、これからさきの理論経済学の先端的課題は厚生経済学と動態経済学であるという話をし、これらの分野では「近く来学予定のポーランドのオスカー・ランゲ博士に大きな期待をかけている」と語って、私たち学生の食欲をそそった。

当時のランゲは、まだ30歳そこそこの青年学徒であったが、頭髪がすでに薄かったし、カリエスになやむ体をステッキに支え、眼鏡をかけた視力もなんとなく弱そうにみえ、最初の夫人も地味な方だったから、私たち学生には、すでに功成り名遂げた大家の印象を与えた。シュンペーターの講義に出てきて、論戦に火花が散ると、2人はドイツ語でわたり合ったが、私たちには、わずかに癖はあるがきれいなよどみない英語で話しかけてくれた。そのころ私たちの眼にふれていたランゲの業績といえば、*The Review of Economic Studies* (June 1934) にのった「効用関数の確定性」にかんする論文だけだったから、私などは特別の期待を寄せていなかったが、ある日、

2人だけで中食をしたときに驚ろいた。いきなり「柴田敬を識っているか」と聞かれ、「識らない」と答えると、*The Kyoto University Economic Review* にのった同氏の“Marx's Analysis of Capitalism and the General Equilibrium Theory of the Lausanne School”をぜひ読むようにとすすめられ、ついでながらに、自分はこう思うという論評もきかされた。その時の話は、まもなく“Marxian Economics and Modern Economic Theory”と題して *The Review of Economic Studies* (June 1935) にのったが、ランゲのマルクスにたいする造詣の深さは並々ならぬものがあることを知ったのである。同時に彼は、「シュンペーターという学者は、たとえば帝国主義を論じ、レーニンをはじめ多くの学者の業績に触れるが、自分がかつてこの主題について論文を書いたことなどは、おくびにも出さない人だ。あなたは彼が *Archiv für Sozialwissenschaften und Sozialpolitik* に書いた長論文を読んだことがあるか」と言う。シュンペーターの講義を1年以上も聞いてきた私にも、実はこれは初耳で、私はこのあと早速、図書館から同書を借り出して、あの難解きわまる“Zur Soziologie der Imperialismen”(1919)と取り組んだのであった。

以来、30年をこえるランゲと私の付き合いは、すれちがいが多く、文通によるのが主であった。1935—36年の学年を彼はミシガン大学で教えたが、たまたまハーヴァード大学内で「社会科学研究グループ」の組織に熱中していた私は、そこで試みようとしていたソ連経済研究の参考書の教示を彼に求めたことがある。1936年3月28日付で彼は返書くれた。「そこに私もいれば、ぜひ参加したいのだが」という書きだして、彼は Maurice Dobb の *Russian Economic Development* や Pollock の *Die planwirtschaftlichen Versuche in der Sowietunion* 以下17冊ほどの書名をあげて、それに簡単なコメントを加え、「いま私が記憶するのは、この程度だ。残念なことに、以上の書物では、経済計算や資源の合理的配分の問題がほとんど取扱われていない。一度、『プラノーヴォエ・ハジラストヴォ』ほか、ソ連の専門雑誌を綿密に調べてみる必要がある」と結んでいる。そのほか、何度も私は

彼に文献のことで教示を得たが、いつでも、記憶のなかから、ひきだしからものを出すように、すらすらと書名や論文名を書いてゆく姿は、特に印象深い。ランゲが滞米中の柴田敬氏と親しく会って年来の議論をたたかわしたのは、ちょうどそのころである。

1937年にランゲは一度ポーランドへ帰った。聞くところによると、当時のポーランドの大学には彼を受け入れるだけの寛容さがなく、翌1938年には、彼は再び渡米して、カリフォルニア、スタンフォード、シカゴ等の大学を転々とした。シカゴに移ってようやく多少は落ち着きを得たようだが、そこで正教授になってからも、自分の発言権の弱いことを嘆いていた。しかし、それも一種の言訳であったかもしれない。というのは、私が1940年にハーヴァード大学で博士の学位をとったあと、ワシントン大学にこないかという話があるがどうしようかと相談したところ、それよりもっと良いところを探そうと真剣に努力してくれ、その結果がおもわしくなかったという事情もあったからである。とりあえず私はハーヴァードに一時的な資格でのこることにし、1940—41年の学年中に新しい職場をきめるつもりで、再びランゲの助言を求めた。1941年の春、彼はしばらくサンタ・フェにいたが、そこから何度も手紙を書いてくれた。しかし、これはと思うところは、どこもうまくいかず、私は再び次の学年度もハーヴァードに席をおくことにし、そこで戦争を迎えたわけである。

ランゲ自身は、戦争中をシカゴ大学教授としてアメリカで暮し、アメリカの市民権さえ獲得したが、祖国ポーランドにたいする関心はおさえがたく、1944年の春には、ソ連で亡命ポーランド人により組織されていたポーランド軍団に招かれてソ連に出向き、その折スターリンとも会って、ポーランドの将来につき意見をかわしたという<sup>1)</sup>。戦争が終り、ポーランド解放と同時に、彼は祖国に帰ったが、ポーランド政府はまもなく彼を駐米大使と国連安全保障理事会のポーランド代表に任命したので、彼は又もアメリカに渡った。この職にあること約2年で、彼は帰国し、ポーランド社会党(のちにはポーランド統一労働者党)の中央委員となり、政府の要職を占めると同時に大学教授としての責をもはたしたのである。

戦争が終ったのちランゲからの最初の連絡は、人を介して *Price Flexibility and Employment* (1944) を届けてくれたことである。"To Shigeto Tsuru, in token of friendship, the author" ときれいな筆致で書かれた挨拶

の言葉は、私にとって、殊のほかなつかしかった。アメリカを交換船で引揚げるときは書物は1冊だけ持ちかえることをゆるされ、帰国後買いあつめた本は1945年春の空襲でほとんど焼かれてしまった私の場合、戦後しばらくは、このランゲの書物ほか2,3冊が机上に大切に置かれていたのである。

それから3,4年のちのことである。多分、中国が共産党政権下に入って1年ほどたってからであったかと思うが、ランゲから、国際経済会議をモスクワで開く計画を冀朝鼎等といっしょに練っている、なんとか出席してもらえないか、という連絡があった。冀も1930年代中頃からの親しい友人だったし、ぜひ出掛けてみたいとは思ったものの、いろいろな事情でこの旅行は実現しなかった。ランゲにしる冀にしる、いずれそのうち再会の機会があるだろうと考えたためでもあるが、いま1つには、ちょうどそのころ私はランゲにたいし、なんとなく疎遠感をいだいていたことも白状しなければならない<sup>2)</sup>。それは、彼が戦争中にスウィーギー批判の一文を草し(*Journal of Philosophy*, 8 July 1943)、スウィーギーにたいしては、その努力に敬意を表しながらも、近代理論の立場からする不満をひれきして、限界理論の効用をたたえたのを、私は読んでいたが、戦後の1949年に *Cahiers Internationaux* に寄稿した「世界経済の2つの途」と題する論文では、どのように行間を読もうとしても、かつてのランゲらしい片鱗さえ見せぬスターリン公式主義の立場をとっているのを、私はげげんに感じていたからである。特に戦時中のスウィーギー批判は、ファシズムを *people's imperialism* と規定し、それは階級闘争によってはくつがえすことができず、他国家との軍事的衝突における敗北を通じてのみ打破することができるものだ、という立場を主張したものであった。周知のように、スウィーギーはこのランゲの批判にたいし『資本主義発展の理論』の第2刷(1949年)への序文において答え、ランゲ理論にもかかわらず、現実にはほぼ自分が1942年に予想したとおりに動きつつあること、ファシズムがすべての階級の利益を結集したところの「人民帝国主義」だなどというのは、全く事実と反するものであること、ヒトラーはまず何よりもさきにドイツ労働階級の組織を破壊したのではないか、などと論じて一矢を報いたのである。

鶴岡氏によると、「1955年までは社会科学の創造的発

2) このことについては、当時「オスカ・ランゲの近況」(1950年4月)と題する短文を書いたことがある。(『官僚と大学教授』勁草書房、1951、pp. 144—150参照。)

1) 鶴岡重成「ランゲの死」『経済評論』1965年12月、pp. 60—6参照。



展をさまたげるような政治状勢」がポーランドにもあったのだという。あるいはそんなこともあったのであろう。戦争が終ってから10年間、ランゲの学問的な仕事といえば *Teoria Statystyki*, 1952(『社会主義体制における統計学入門』岩波書店, 1954)だけで、彼が1953年に書いた「スターリンの労作の解明する経済学の諸問題<sup>3)</sup>」などは、政治的動機さえ感じさせるのである。あとでも述べる通り、ランゲの戦後の学問的な仕事は、1956年以後死にいたるまでの約10年間の時期に属するのだ。ちょうどその1956年にはマハラノビスの招きでランゲはインドまで来、足をのばして日本にこようかという話もあったのだが、私自身、そのころ1年の予定でアメリカへ出発するまぎわのことで、利己心も手伝い私は時期を更めるよう提案したことであった。その後は、私にポーランドにこないかという話があり、1962年に私がウィーンまで出かけるついでがあったときには、そのチャンスでもあったのだが、このときはランゲの健康が思わしくなく、スイスに療養に行くというので、又の機会を約した。かくして私は、ついに別れて25年近くのあいだ、ランゲとはすれちがいを続けたまま、昨年ニュージーランドから帰国の途次、彼の訃報に接することとなってしまった。今となっては、彼の冥福を祈るよりほかない。

## 2

ランゲの学問的業績については、稿をあらためて、本格的な検討をすべきことだと思ふ。ギムナジウム卒業後、一度はポズナン大学に席をおいたが、高校時代すでにマルクスの著書に親しんでいた彼は、そこでの保守的な雰囲気が入らぬ、2年目からはクラコウ大学に移って、アダム・クシジャノスキに師事した。1928年に24歳で博士号の学位を得たが、その時の論文名は『1924—27年間のポーランドにおける景気変動』である。そのころの彼の関心は、学問に劣らず政治にあったもようで、1927年にはポーランド社会党の党员となっているし、学位を受けたのち大学にのころうとする試みも、彼の政治活動が大学当局を刺激したため不首尾に終わったと伝えられる。じじつ、学位論文を書たいあと、1933年ころまで、理論経済学者としてはいちばん生産的であるはずの時間に、ランゲはこれという業績ものこしていない<sup>4)</sup>。しかし、

3) これは *Nauka Polska*, No. 1, 1953 に発表されたものであるが、その英訳は “The Economic Laws of Socialist Society in the Light of Joseph Stalin's Last Work” と題し、*International Economic Papers*, No. 4, 1954, pp. 145—180 に収められている。

4) 1933年末までの彼の著作目録は末尾に付録として掲げたので、それを参照されたい。

その間に思う存分の摂取を続けていたことは明らかで、さきに言及した *The Review of Economic Studies* 誌上の2論文に続き、同じ雑誌(October 1936及びFebruary 1937)に “On the Economic Theory of Socialism” を発表するに及んで、一躍学界での名を挙げた<sup>5)</sup>。これは、その後まもなく Benjamin Lippincott の編集で、F. M. Taylor の短かい論文<sup>6)</sup>と合せ、1冊の書物として出版されたが、経済学者のあいだでは、ただちに活発な論争の対象となった。その要点は、競争的均衡の利点を社会主義計画経済にとり入れる可能性とその方法を説いたもので、デシジョン・メーカーをできるだけ分散し、価格のもつパラメーター機能を試行錯誤の方法で活用することにより、計画経済での資源配分の合理化をはかろうとしたものである。彼が戦後に実際にこの理論を適用する地位におかれたとき、10年前に考えたことをどの程度真剣に試そうとしたか、私は詳らかにしていない。ただ、彼が戦争の終る直前まで限界分析の方法に信を置いたことは、*American Economic Review* の1945年3月号に書いた “Marxian Economics in the Soviet Union” によっても明らかである。この論文は、戦争中にソ連で経済学の教課にかんし、計画経済における価値法則の意義を見なおす新しい立場がとられるようになったことをめぐって、アメリカで生じた論争に参加する形で書かれたものだが、「これでソ連の経済学者も、少なくともマルクスの本来の考え方に返った」と評したあと、そこから更に一步を進めて「限界分析の方法と技術を取り入れるところまで行くべきである」と結び、自分が1936—7年に発表した論文にも言及しているのである。もっとも晩年には、多少考え方を変えたもようで、彼の下で戦後に学んだ S. Ganguli は「社会主義社会での市場メカニズムについてのランゲの最近の見解は、1936年当時のそれと非常に異なったものとなっていた<sup>7)</sup>」と書いている。

ランゲもまた、ケインズの『一般理論』の影響を大きく受けた経済学者の1人であった。ケインズのこの書物が公けにされたのは1936年初頭で、そのイギリス版の第1便がアメリカに着いたのは、その年の3月初めだったが、ランゲはそのころミシガン大学で教えていた。いわば経済学研究の中心地からは多少離れていて、ただち

5) もっとも、それよりさきランゲは同じく *The Review of Economic Studies* (June 1936) に “The Place of Interest in the Theory of Production” と題する論文を発表している。

6) “The Guidance of Production in a Socialist State,” *American Economic Review*, March 1929.

7) S. Ganguli, “Oskar Lange: The Complete

には論争に参加しなかったが、そのあと1年間ポーランドに帰国していたあいだに書いたと思われるのが *The Rate of Interest and the Optimum Propensity to Consume* (*Economica*, February 1938) であり、これは、当初第三者には難解であったケインズの新理論を、その論理構造を明らかにし簡単な関数を使い定式化することにより、その特徴と制約とを一挙に明らかにした論文のひとつに数えられている。

この時以来、1945年末まで、ランゲの学問的業績は近代経済学のほぼ最先端に位置を占めた多彩なものであった。なかでも特にしばしば引合いに出されるのは、ケインズの「セイの法則」についての解釈を精密化した“Say's Law: A Criticism and Restatement”<sup>8)</sup>と、貨幣と財貨とのあいだの代替関係に注目したケインズの発想を一般化して「貨幣的効果」の概念を導入した *Price Flexibility and Employment* (1944) とである。そのほかにも数点の論文<sup>9)</sup>があるが、ほとんどそのいずれもが、ケインズが提起した問題を一般均衡理論と調和させようとする方向のものであって、彼がその当時、経済学をどのようなものとして理解していたかを十分に察知させる。ケインズの『一般理論』が公けにされてから約10年間のあいだに、近代経済学の進歩にランゲがどのように貢献したかという点については、戦後 American Economic Association が企画し、エリスの編集で編まれた

Social Scientist,” *The Economic Weekly*, 25 December 1965, pp. 1886—7. なおガングリによると、ランゲは、現在であったら1936—7年の論文を“The Computer and the Market, an Essay in Economic Cybernetics”と題して書き直したいところだ、と語っていたという。なお、さきにも言及した「スターリン論文」へのコメントは、*The Review of Economic Studies*, February 1937 論文の末尾の付録“The Allocation of Resources under Socialism in Marxist Literature”の「改訂版」とも言っているものであろう。ほぼ同じ主題を扱いながら、内容にかなりの修正がみられるほか、前にはカウツキーからの引用を多く行なうて、それに同情的な態度を示していたのに対し、新しい論文では、カウツキーの名が全く消えている。同じ主題にかんして、そのほかに、ランゲが戦時中に書いた *The Working Principles of the Soviet Economy*, Russian Economic Institute, New York, 1943 も参照すべきであろう。

8) *Studies in Mathematical Economics and Econometrics*, Chicago, 1942.

9) たとえば“Saving in Process Analysis” *Quarterly Journal of Economics*, August 1939; “Complementarity and Interrelations of Shifts in Demand”, *Review of Economic Studies*, October 1940; “A Note

*A Survey of Contemporary Economics* (1948)<sup>10)</sup> を見れば、その人名索引でランゲの名が28回も出ていて、ケインズとヒックスに次いで多いことから想像できよう。

この時期のランゲの学問的指向を知るうえで欠かすことのできないのは、戦争末期に彼が書いた“The Scope and Method of Economics”, *The Review of Economic Studies* (June 1945) である。非常に集約された論文であるが、おそらくこれが彼の経済学にかんするもっとも純粋に彼らしい論文ではなかったかと思われる。ここでの彼の経済学の定義はライオネル・ロビンズのそれ<sup>11)</sup>と同じであるといっても過言ではない。稀少資源と人間欲望のあいだの関係として「経済的行動」を規定すれば、理論経済学は、ランゲの言うとおりの「数個の基礎的な命題から論理の法則(または数学上の法則)によって演繹的にひきださうる一連の命題」ということになってしまう。そして、理論経済学者のあいだで見解が異なりうるのは、社会的目的の相異によるか、事実についての意見不一致によるか、論理の法則を守らなかったことによるか、そのいずれかでしかない、ということにもなるのだ。では、マルクス経済学にとってきわめて重要な意味をもつ生産様式(または経済制度)のちがいは、どういうことになるのか。この点についてのランゲの答えは興味深い。まず彼は、経済的行動の決定単位を、家計と企業と公益機関の3つに分ける。そして、生産の過程で家計による決定が支配的である「経済組織」を“domestic economy”と呼び、企業による決定が支配的であるものを“capitalist economy”と呼び、公益機関による決定が支配的であるものを“socialism”と呼ぶ。企業でも、私有と公有の別があるが、公有でありながら分散的決定権をもっている企業の決定が支配的である場合は“state capitalism”と呼ばれる。経済的行動の決定単位ごとに“rationality”の基準を考えることができ、大別すれば、これは「私的合理性」と「社会的合理性」とにわかれる。ある条件のもとでは、私的合理性の追求にまかせることが、かえって社会的合理性をつらぬくゆえんでもありうるが、常にそうであるとはかぎらない。自由放任主義にたいする批判はここから生ずる。

だいたい以上がランゲのこの論文の要点であって、その on Innovations,” *Review of Economic Statistics*, February 1943; “The Theory of the Multiplier,” *Econometrica*, Jul-Oct. 1943 等がある。

10) 邦訳は都留重人訳監修『現代経済学の展望』全3巻、岩波書店、1951。

11) *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, 1932.



れじたいにおいては見事な一貫性をもち、1934—44年間の彼の経済学上の仕事とも齎合しているということができよう。ところが、彼の近代経済学者としてのキャリアは、この論文をひとつの転機とした。このあと戦争が終わり、駐米大使などをしていたあいだ、彼はほとんど何も書かず、その後ポーランドへ帰ってからも、さきにも言及した統計学の書物ぐらいが当座の学問的業績である。いくらかでも昔のランゲらしさを思い起させた戦後最初の論文は、彼が1956年にインドを訪ずれた時に書いたと思われる“Some Observations on Input-Output Analysis”, *Sankhyā*, (February 1957)である。このころから、彼の経済学上の労作は多面的になると同時に、彼のかつての近代経済学者としての素養の片鱗が、あそここにうかがえるようになった。1958年には『計量経済学入門』が出、1959年には『エコノミスタ』誌上の論文「経済成長モデル」が書かれたほか『政治経済学』第1巻が公けにされ、1961年には『再生産と蓄積の理論』の出版と同時に、1930—1960年間の主な論文を1冊にまとめた *Pisma Economiczne I Społeczne* が発行された。このあと続いて『政治経済学』の第2巻および第3巻を完成する予定であったらしいが、1961年以降の彼の健康は思わしくなく、晩年特に力を入れていたサイバネティクスとリニア・プログラミングにかんする2著<sup>12)</sup>をのこして、彼はこの世を去ってしまった。

『政治経済学』第1巻での叙述では、経済学を定義するにあたって、かつて1945年の論文で「人間社会における稀少物資の管理にかんする科学」と書いたのとちがい、「人間の欲望をみたす物質的手段の生産と分配を規制する社会法則にかんする科学」と言っているほどで、かなりの変化が見られるが、それにしても、戦時中に展開した「合理性」を軸とした方法論を受けついで発展させた部分が特徴的で、次第に彼の本領が再び学問的業績のうえにあらわれてきたことを感得させるのに十分であった。この彼の本領がようやく何の遠慮も必要としないような政治環境のなかで、思う存分発揮できるようになったと思われた時機に、彼をほとんど生涯にわたり悩ました厄病についに打克せず、還暦を終えてまもなく他界したことは、経済学界のために惜しまれてならない。1964年11月、ワルシャワ計画大学の大講堂で、カレツキの誕生65年、ランゲの60年を祝賀する集会が開かれたおり、ランゲは、「もし事情がゆるせば『社会主義と経

済学』といった標題の自叙伝風の本を残しておきたい」と、静かに語ったとのことである<sup>13)</sup>。常に忍耐強く冷静な、そして度を超えることのない彼であった。しかし、人間的には、自分だけで秘めていた精神の葛藤と無縁であったとは思われない。その彼が、もし自叙伝を書くまで天命を保っていてくれたら、と私などは思わぬでもない。しかし、いくら長生きしても、ランゲは自叙伝など結局は書かずに終る型の人物ではなかったかとも思う。

### 付録：ランゲ著作目録，1925—1933

ここでは特に、ランゲが1934年に渡米するまでの著作目録だけを参考のために挙げた。

#### 1925

1. 「中世におけるゲルマン法による大ポーランドでの都市植民」  
*Pamiętnik Historyczno-Prawny*, 1925. (ポーランド語)

#### 1928

1. 『1923—27年間のポーランドにおける景気変動』(学位論文)(ポーランド語)
2. 「エドワード・アブラモフスキの社会学と社会思想」*Przegląd Współczesny*, 1928. (ポーランド語)

#### 1929

1. 「社会主義への移行又は資本主義の新段階」  
*Robotniczy Przegląd Gospodarczy*, No. 3, 1929. (ポーランド語)

#### 1931

1. 「独占資本主義における国家の役割」*Kwartalnik Socjalistyczny*, No. 1, 1931. (ポーランド語)
2. 「景気循環の統計的調査」*Czasopismo Prawnicze i Economiczne*, 1931. (ポーランド語)

#### 1932

1. 『経済的均衡攪乱の統計的計測手段としての価格分散』1932. (ドイツ語)
2. 「経済諸量の一般的相互関係と分離方法」*Zeitschrift für Nationalökonomie*, Bd. 4, H. 1, 1932. (ドイツ語)

#### 1933

1. 「フリードリッヒ・エンゲルス著『社会主義—空想より科学へ』への序文」1932. (ポーランド語)

12) *Wstęp Do Cybernetyki Economicznej* と *Optymalne Decyzje-Zasady Programowania* の2著である。このうち後者は近く英訳版が出るという。

13) 鶴岡重成，前出，p. 64.